

近世中期・後期の伊賀街道加茂宿と山田

丸尾 佳二

はじめに

加茂町は、京都府山城地方の最南端に位置し、南を奈良県奈良市と接している。四方を二〇〇〜三〇〇メートルの小高い山並みに囲まれており、小盆地のほぼ中央を東西に一級河川の木津川が横切っている。

加茂盆地には、奈良時代、平城京から木津川河谷を東進するルートをとっていた古東海道の岡田駅が設置され、^①聖武天皇による恭仁京遷都後は、恭仁京と近江甲賀郡を結ぶ恭仁京東北道が開通した。^②下つて文明五年（一四七三）には、応仁・文明の大乱を避けて奈良にいた一条兼良が、加茂を経て近江に抜け、美濃路をめぐる^③。このように、加茂は、古代・中世から交通回廊の要衝の地であったのである。

近世に入ると、伊賀街道から信楽街道が分岐する加茂の重要性は飛躍的に増し、加茂宿が設けられた。本稿では、近世中期・後期におけ

る伊賀街道加茂宿および加茂宿と笠置宿のあいだの山田集落の様相についてみることにしたい。

一 加茂宿と山田集落の成立

奈良―上野―津・久居を結ぶ伊賀街道は、加茂地域のメインルートとしての役割をになった。伊賀街道は、暗越奈良街道・上街道が結節する奈良樽井町を起点として、三条通を東へ進み、春日社一の鳥居前から北上し、奈良坂の奈良豆比古神社前で京街道から分岐し、上梅谷を経て通称「おかゆ峠」を越え、高田の集落から木津川南岸に至る。

この木津川南岸の自然堤防上に形成された町場が、奈良を出て最初の宿場となる加茂宿である。近世前期の伊賀街道は、加茂宿から木津川南岸沿いに次の笠置宿に通じていた。^④

加茂宿のすぐ北側を流れる木津川には、古くから加茂の渡しがあり、対岸の瓶原郷から和東郷を通り、信楽へと道がつづいていた。つまり、加茂宿は、信楽街道が伊賀街道から分岐する起点の宿場でもあったのである。一方、加茂宿の木津川原側には、加茂郷の中心的浜である加茂浜があり、一口浜・吐師浜・木津浜・瓶原浜・笠置浜とともに木津川筋六カ浜の一つとして、舟運でもたいへん賑わった（ちなみに、加茂宿界限は、舟運に携わる人々に相応しい「船屋」という地名で呼称されている）。すなわち、加茂宿は、陸上交通と水上交通の接点に位置していたといえよう。

その加茂宿がいつ設定されたかは、正確には明らかではないが、慶安元年（一六四八）三月に、津藩城和奉行西嶋八兵衛・中小路五郎右衛門が加茂・笠置両郷に対して馬継・駄賃荷物などに関する条目を発令している⁵ので、このころには宿場としての機能を保持していたとみられる。

ところで、大河木津川は、前述したように舟運を発達させ、加茂地域は旅客や物資の通過で栄えたが、反面、枚挙に暇がないほどたびたび加茂地域に水害をもたらしている。そのなかでも、加茂地域を含む南山城一帯にとりわけ大きな被害が出たのが、正徳二年（一七一二）八月十八日の大水害であった。この正徳二年の大水害によって、里村・大野村など加茂郷の村々は水没し、これを契機に各集落はそれぞれ周囲の山麓に移転した。木津川南岸を並行している伊賀街道と加茂宿も、当然潰滅的打撃をうけたのである。

同年十二月、津藩は、正徳二年の大水害を教訓として、木津川の増水による陸上交通路の途絶を避けるために、加茂から笠置に通ずる伊賀街道の付け替え工事に着手した⁶。新たに造成された道は、山田を経由して、野田谷で木津川南岸へ至る山越えのルートで、このいわゆる「山田新道」が、以後伊賀街道の一部として供用されることとなったのである。

さらに、この伊賀街道の付け替えに関連して、山田への出百姓（入植者）が募集されている。里村・北村・兎並村の庄屋・年寄が、津藩等置代官北村傳蔵に出した正徳三年七月二十一日付「奉願口上之覚」⁷によると、

一此度山田道出百姓加茂方ニ相望申者ハ無之哉と 御尋被為成候二付、里村・北村・兎並村右三ヶ村之者共吟味仕申候得ハ、

（里村・北村・兎並村各二名の名前省略）

右之者共六人、本村ニ而茂御年貢少々宛負無高同前之百姓ニ而御座候二付、渡世のためニ相届申候、然共今般小キ居家ヲ引申義も仕兼申程之者ニ御座候得ハ、出百姓居馴染申候迄毎年老人前ニ弔石宛之御用捨米被為下、其上人前ニ五年賦ニ銀百目宛御借シ被為下、小屋がけ之松木被下候ハ、出申度奉願候、右五年符銀之義ハ本村ヨリ御請入可申上候、右之者共、道筋へ出申候ハ、往来之義ニ氣ヲ付させ随分御用等相勤させ可申候（後略）

とあり、里村・北村・兎並村から各二名ずつの計六名が、開墾のかたわら新道の管理に従事することとなった。

他方、宿場と浜の両方の機能を備えた加茂宿の方も、着実に回復を示し、里村・北村・兎並村の人々によって、あらためて形成され、宿場としての再生をはたした。⁸⁾ なお、この三村入り組みの形態は現代まで継承されており、船屋地区は里・北・兎並の土地が複雑に錯綜している。そして、加茂宿は、行政的にはあくまで三村入り組みで、町立されていないのであるが、近世中期以降、「船屋町」とも呼ばれるにいたった。

文化三年（一八〇六）に成立した「五海道其外分間延絵図並見取絵図」の「加太越奈良道見取絵図」⁹⁾（以下、「分間延絵図」と略称）に描かれた加茂宿の町並みは、L字を時計回りに九〇度回転させた形となっている。明治二十一年（一八八八）測量の仮製二万分の一地形図においても、ほぼ同様の景観を呈しているため、これが近世中期・後期における加茂宿の基本的な構図と考えられる。そのL字型の町並みは、現在東から西へ東町・中町・西町、直角に南に折れて南町の四町で構成されている。

二 加茂宿の間屋・本陣

「分間延絵図」には、加茂宿の町並みが詳細に描写されており、伊賀街道に沿って総数一七六棟の建造物をみる事ができる。建物の数は、必ずしも正確ではないにしても、宿場町としての加茂宿の規模を

推察する上で、一つのメルクマールにはなるであろう。

次に、加茂宿の中心機能をはたす間屋と本陣についてみよう。

「分間延絵図」をみると、東西路の北側やや東寄りに「間屋」と注記された建物群がある。その規模はかなり大きく、土蔵六棟を含む一〇棟の建物が門塀・柵で囲繞されている。この加茂宿の間屋の位置は、東町の吉本俊久家（図A）である。吉本家の所有に帰する以前は、松村助左衛門が所有者で、加茂宿の間屋をつとめていた。松村氏は、天正十一年（一五八三）に多武峰より北村に移住したといい、津藩政下では「無足人」と呼ばれた郷士であった。¹⁰⁾ 間屋の主な業務は、公用旅行者のための人足や馬などの手配、公用文書を運ぶ飛脚の管理などであるが、享和三年（一八〇三）五月に、幕府分間役人の加太越奈良道実査に対する返答のため作成された「手覚帳」¹¹⁾には、宿馬・賃銭について、

一宿駄賃 宿馬二十疋

御用馬数入用之節、助郷より呼申候

南都え

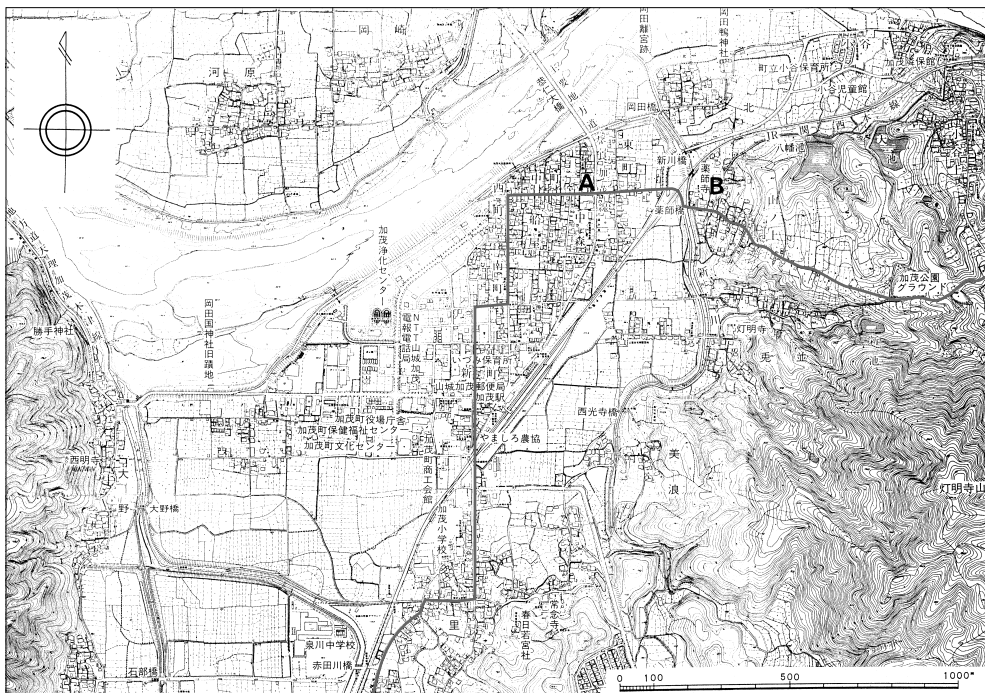
本馬 百廿三文

半馬 七十八文

人足 五十九文半

笠置え

本馬 八十三文



加茂宿の現況 (1:10,000地形図「加茂町全図」 1995修正に加筆 ×45%)

半馬 五十五文
人足 四十巻文

とある。

ところで、「分間延絵図」では、加茂宿の町並みのなかに本陣を見出すことができない。実は加茂宿本陣は、伊賀街道が丘陵部へ入る山ノ上に設けられていたのである。「分間延絵図」は、山ノ上の坂道の北側に「本陣」と記している。正徳二年の大水害後、伊賀街道のルートが変更されたことは既にもみてきた通りであるが、これにかかわって津藩は加茂宿本陣の位置についても検討を重ねている。¹²⁾ 水害のリスクを勘案して、本陣を丘陵端の山ノ上に置いたのであろう。

この本陣の位置は、梶田武俊家(図B)である。梶田氏は、文亀三年(一五〇三)美濃国から北村に移住したといい、松村氏同様津藩の無足人である。¹³⁾ 江戸時代中期・後期には、津藩城和領加茂組の大庄屋を五回つとめるとともに、加茂宿本陣として、大名などの通行に際しては重要な役割をになっていた。ちなみに、同家には津藩の支藩である久居藩主藤堂氏が宿泊したときの関札「二月晦日／藤堂佐渡守泊」がのこされている。

大名などの通行に関する地域史料は既に紹介されているので、¹⁴⁾ ここでは文化十一年三月八・九日、九州第二次測量の帰りに加茂を測進した伊能忠敬一行の様子を、「測量日記二十六」¹⁵⁾ から引用しておく。

同日 晴天、(中略) 植村駿河守御預所奈良坂村、右伊賀越追
 分別手残制札前㊦印に繫二十三町十八間三尺、街道合二十八町九間
 三尺、此より加茂通伊賀国へ測、奈良坂村、長坂国境迄十三町四十
 五間街道、山城国相楽郡中宮御料、小堀支配木津郷梅谷村、昼休百
 姓忠蔵、藤堂和泉守領分加茂郷高田村、猿渡川土橋六間、同郷里村
 字山崎、木津道追分㊧印に打止、街道一里十町四十八間、同三合二
 里十六町四十二間三尺、それより無測加茂郷北村へ八ツ時後着、止
 宿大庄屋梶田順蔵

同九日 晴天、(中略) 藤堂和泉守領加茂郷観音寺村、石部川土
 橋六間、赤田川九間、同領同郷里村枝山崎、右奈良街道昨日別手の
 残㊨印に繫一里十四町二十五間四尺、左十五町斗山添に三ヶ原郷人
 家一群、名所泉川、北村、北村・鬼並村・里村三ヶ村入会、船屋町
 駅場加茂駅という、枝山上村、昼休大庄屋梶田順蔵、字市ヶ辻、牛
 谷川土橋手前別手の残㊩印に繫終る、三十五町三十七間三尺、惣測
 二里十四町三間一尺、それより無測二里斗北笠置村へ八ツ時頃着、
 それより笠置寺へ行く

別手(中略) 相楽郡上野、藤堂領加茂郷北村・免並村・里村三ヶ
 村入会、牛谷川土橋端㊪印初、字山田、同領南笠置村枝五軒屋、大
 川舟渡し五十四間、即木津川、同領切山村枝草畑、同領北笠置村駅
 場(後略)

右の文言中に「大庄屋梶田順蔵」とみえるのが、加茂宿本陣梶田家で

ある。

三 加茂宿・山田の旅籠屋

最後に、一般の旅人や公用でない武士が利用した宿泊施設である旅
 籠屋についてみてみよう。現在、船屋地区においては、関宿の玉屋の
 ような近世からの伝統をもつ旅籠屋の建物は、残念ながらのこされて
 いない。

加茂宿に存在した旅籠屋に関しては、次のような史料がある。第一
 は、安永三年(一七七四)の高山彦九郎の伊勢神宮・上方への旅行記
 「甲午春旅」¹⁶⁾である。二月十四日、上野を出た彦九郎は、伊賀街道を
 奈良に向かって歩く道中を、

十四日 天気よし、(中略) 嶋か原を大河原迄ハ山路也、此間伊賀
 山城近江の境有、大河原ハ相楽郡也、それ北笠置川を渡りて南
 笠置是笠置山の麓也、それ笠置山江登ル、八丁六丁程登り寺村
 とて民家拾軒程有、式町斗上り福壽院と言寺有、少行て右二宝蔵
 左二御まへ寺の社有、それ本堂江不行左江入、薬師岩かいふき
 岩の右の方二陳所の跡有是北の方ゆるき岩見ゆる、夕暮二及し
 故不行、其下二なまつ岩有、それ道も不知難所を通り屏風岩の
 下江出其先胎内くまりと言所くまり□大石□有、それ
 (虚空蔵)
 コクウソウ岩上りて本堂西ノ方みろく岩其脇楠岩又ノ説
 (胎蔵界)(金剛界)
 タイソウウカイコンコウウカイと言岩也と言へり、それ下ル、此山

ハゲタツ上人開基也と言へり、此山ニ墓有是余程下り向ふの

山也と言へり、それ夜二入〔加茂〕かも二宿ス大坂屋

十五日 天氣よし、今朝かも出此処ハ三千七百石の所ニ而在の小名多シと言、かも大明神の社有、かも川の向ニみかの原名所也、泉川ハ木津川ニ至テ一流となるといへり、木津川源ハ伊賀川笠置ニ而ハ笠置川と言かも二而ハかも川と言皆一流別名也、それ山切通しを過テ宇治と言所本名ハ梅谷爰ハ八丁過テ山城大和の境也、それ南都江入〔後略〕

と描写しており、当時加茂宿に大坂屋という屋号の旅籠屋があったことが判明する。

第二に、天保十一年（一八四〇）七月、伊賀街道筋の奈良手貝町・加茂宿・笠置宿・島ヶ原宿の旅籠屋仲間・宿渡世惣代が、街道を通行する旅人への対応を取り決めた「規定書連印帳」がある。

規定書連印事

一 伊賀越道中と申者、勢州月本より相分り、夫より久居、三軒茶屋、長野、平松、山田、上野、嶋ヶ原、大川原、笠置、加茂、奈良工と此道筋通行を伊賀越と唱、往古より旅人通行致候事故、何れ之休泊所ニおゐて旅人大切ニいたし、少しニ而も道筋休泊所渡世之者差障ニ相成候儀者、素より廉直ニ取斗ひ、兎角伊賀越道中工多分旅人通行いたし候様、相互ニ家業相励候様、可仕儀專一二相心

得可申事

一 銘々共は、此道筋ニおいて旅人休泊為仕渡世之者故、是迄相互ニ励合伊賀越道中繁栄致候様兼々相祈罷有、依而此道中旅人多ク通行繁栄いたし候ハ、自然と銘々渡世も右ニ随ひ繁栄いたし候道理ニ付、是迄之儀者格別向後別而家業励合、旅人大切は不及申ニ、道筋何れの方ニおゐても旅人心障りに相成候儀者決而不致、何れも相互穩ニ取斗、旅人工悪敷差図又は休泊所差支等ニ相成候儀ハ、曾以差教工間敷候事

一 近年猥ニ相成伊賀越道中之内、休泊渡世之者より旅人工悪敷差図等いたし候族も有之、既筋違宿札書付等旅人工相渡し、肝心之道筋休泊所を不教候間、宿渡世之者難渋いたし候ニ付而ハ、川下之宿より川上之宿工賄賂致候様成事共間々有之、尤川下之宿渡世と申ハ、乃至奈良宿より加茂、笠置、嶋ヶ原等の宿渡世之方工賄賂いたし候儀ニ而、其賄賂遣申候ハ、順道ニ旅人差向、或者賄賂不遣時は旅人工悪敷差図いたし筋違之宿ヲ差し、川上之威光ヲ以川下之宿々為相〔惱〕候事者有之、以之外不人情之取斗、道中宿渡世之者は相互ニ平和睦敷いたし可申之処、右様ニ而者意隔不相止、第一旅人為相惑且往々斯惡風之事共、旅人工押移り候時者、自然と伊賀越道中工旅人通行不致候様成行可申、左候へハ宿渡世之者一体ニ衰微いたし、其節如何程相歎候とも詮なき事ニ候間、右体之惡風儀旅人工移り不申様、此度相改規定連印仕候上は何分川上より川下ニ而侮、決川下之休泊所難儀筋ニ相成儀堅いたし間敷管、

若心得違之族有之候ハ、互ニ相糺し、たとへは笠置宿之不埒は大川原より急度相制し可申、亦奈良ニおゐて不埒有之加茂より相制し、斯川上之宿々より相調べ川下にて存不侮、亦賄賂ヲ以旅人エ不筋之宿名差等不仕、其外筋違之宿屋より被頼、旅人エ宿名差之書付等遣し不申筈ニ申堅メいたし候、然ル上者此規定相守旅人之随意ニ任セ、此後露聊旅人為惑心障リニ相成り候事ともいたし間敷規定之事

前段之通り川下之不埒ハ、都而川上より急度制度いたし不筋之儀致間敷候、若此規定ニ相背キ候宿渡世之者有之ハ、此規定書ヲ以て如何体ニ取斗ひ候とも、其節相互ひニ少しも申分無御座候、依而後々迄違背仕間敷、為其道筋宿々一統連印仕置候処、如件
天保十一子年七月

和州奈良手貝町

旅籠屋仲間

惣代 とうふ屋庄 吉印

同所惣代

茶わん屋助右衛門印
(碗)

加茂宿

宿渡世惣代

茶わん屋喜 八印

井筒屋 喜 助印

笠置宿

宿渡世惣代

中寫屋 仁兵衛印

大津屋 忠 助印

嶋ヶ原宿

宿渡世惣代

徳田屋 惣右衛門印

いわさ屋市郎兵衛印

これによれば、奈良手貝町および加茂宿・笠置宿・島ヶ原宿の旅籠屋のなかに、互いの営業を妨害する動きがあったことがわかる。不正が横行すれば、当然客離れを惹起し、伊賀街道筋の旅籠屋が衰微することとなるので、相互チェックによる是正を目的として結ばれたものである。この規定書には、加茂宿の宿渡世惣代として、茶碗屋喜八と井筒屋喜助の名がみえるので、加茂宿における茶碗屋・井筒屋という旅籠屋の存在を確認することができる。

今のところ、近世中期・後期における加茂宿の旅籠屋は、以上みてきた大坂屋・茶碗屋・井筒屋の三軒が明らかとなっているのみである。筆者の聞き取り調査では、ほかに数軒が元旅館を営んでいたというものの、近世にまでその創業が遡りうるかどうかは、史資料を欠いており明らかでない。

さて、正徳三年の山田への出百姓（入植者）については前に言及したが、およそ百年後の「分間延絵図」は、伊賀街道をはさんだ南北に

五六棟の建物が展開する山田集落の姿を描いている。別の「山田付近新田絵図」⁽⁸⁾には、旅籠屋と思われる二階家も描かれており、加茂宿と笠置宿のあいだに位置する山田の集落が、いわゆる「間の宿」的機能を持つていたことがうかがわれる。地元の高齢者グループによる調査⁽⁹⁾によれば、山田には、伊賀屋・味噌屋という旅籠屋を営んだ家があったという。

おわりに

以上、近世中期・後期における伊賀街道加茂宿および山田集落の様相について、問屋と本陣、ならびに旅籠屋を中心に述べてきた。

今日、宿場町としての加茂宿を継承しているのは船屋商店街であるが、スクラップ・アンド・ビルドによって往時の景観は失われ、町場のスプロールの結果かつてのL字型の町並みは面的に拡大した。さらに、交通形態と購買形態の変化にもなって商店街の地盤沈下が進み、その活性化が課題となっている。

- (1) 『続日本紀』和銅四年一月二日条。
- (2) 『続日本紀』天平十四年二月五日条。
- (3) 「藤河の記」(福田秀一・岩佐美代子・川添昭二・大曾根章介・久保田淳・鶴崎裕雄校注『中世日記紀行集』〔新日本古典文学大系五一〕 岩波書店・一九九〇)。
- (4) 宇治市歴史資料館所蔵「正保山城国絵図」。同図については、磯永和貴「宇治市歴史資料館本「正保山城国絵図」の記載内容」『歴史地理学』三六一三—一九九四) 参照。
- (5) 上野市立図書館所蔵西嶋家文書「万大控」。

(6) 『永保記事略』正徳二年十二月条。

(7) 里春日若宮社文書。

(8) 森春烈久「船屋」のなりたち」(加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第二巻近世編 加茂町・一九九二) 参照。

(9) 東京国立博物館所蔵。資料名は、重要文化財の指定名称である。なお、「加太越奈良道見取絵図」は、東京美術から第一巻上(一九九八)・第一巻下(一九九九)・第二巻(二〇〇二)の三分冊で刊行されている。

(10) 梶田家文書寛政十年十二月「無足人由緒御改帳」。

(11) 松岡家文書、拙稿「近代への胎動」(加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第五巻資料編2 加茂町・一九九九)。

(12) 『永保記事略』正徳三年二月二十一日条。

(13) 註(10)に同じ。

(14) 樋爪修「伊賀街道のにぎわい」(加茂町史編さん委員会編『加茂町史』第二巻近世編 加茂町・一九九二) 参照。

(15) 伊能忠敬記念館所蔵。引用は、刊本(佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第五巻九州第二次の二 大空社・一九九八)による(並列点・傍注は引用者)。

(16) 高山彦九郎先生遺徳顕彰会編『高山彦九郎全集』第一巻 博文館・一九四三(傍注「」は編者、「」は引用者)。

(17) 岩佐氏所蔵文書、三重県教育委員会編『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道―歴史の道調査報告書―』 三重県教育委員会・一九八四。

(18) 松吉家文書。

(19) 加茂町教育委員会編『加茂町の老人大学』第V集 加茂町教育委員会・一九八一—二六頁。

〔付記〕

本稿作成にあたっては、筆者の前勤務先である加茂町史編さん室・加茂町教育委員会生涯学習課文化財保護係に事務局を置いて進められた加茂町史編さん事業の成果、なかでも第二巻近世編の叙述にその多くを負っている。また、奈良県立奈良図書館の山上豊氏、南山城村史編さん室の小川美由紀氏のご協力を得た。記して、謝意を表したい。

内田 星美 東京経済大学名誉教授

和田 一夫 東京大学大学院経済学研究科教授

長友千代治 佛敎大学文学部教授

高橋 哲雄 大阪商業大学経済学部教授

飯田耕二郎 大阪商業大学総合経営学部教授

山本 和明 相愛女子短期大学助教

小田 忠 大阪商業大学商業史博物館学芸員

池田 治司 大阪商業大学商業史博物館学芸員

後藤 郁夫 大阪商業大学商業史博物館職員

丸尾 佳二 大阪商業大学商業史博物館特別職員

運営委員

矢野 惠二 大阪商業大学経済学部教授

石上 敏 大阪商業大学経済学部教授

▼私たちが商業史博物館の職員は、ここ数年「博物館の展示調査及び資料収集」を目的として、全国の興味ある博物館の調査に出張している。私は昨年福岡、長崎の博物館へ七カ所ほど出向いた。長崎は学生時代以来三十数年ぶりである。懐かしいグラバー庭園に立って長崎港を見下ろしながら起伏に富んだ眺望絶佳の町並みと、エキゾチズムと二〇世紀の悲劇の交錯するこの町の歴史に思いを馳せるとき、その歴史的価値と美的価値の両者相俟って、スケールこそ違え、長崎こそ高橋哲雄先生のいう「博物館都市」ではないかという思いがよぎった。長崎だけではない。日本にも他に「博物館都市」と名付けてもよい所があるだろう。「博物館都市巡り」は日本編も是非お願いしたいものだ。

▼私は内田先生と面識はないが、前いた出版社でハウシエルの『アメリカン・システムから大量生産へ』という大著の翻訳本を企画する時、先生の原著に対する書評を読み出版を決めたという経緯がある。そして、この本の存在を教えて頂き、自ら中心となって翻訳をされたのが『豊田喜一郎文書集成』を編纂されたことのある和田先生である。お二人にこの寄稿頂けたのも何かの縁と言うべきか。

（後藤郁夫）

大阪商業大学商業史博物館紀要 第二号

平成一四年二月二五日発行

編集・発行 大阪商業大学商業史博物館

〒577-8505 東大阪市御厨栄町四一―一〇

☎〇六（六七八五）六一三九

印刷・製本 株式会社トープ

〒591-8032 堺市百舌鳥梅町一―一八一二

☎〇七二（二五七）五七八五

